

それから就職、結婚、そして子供が生まれ、ベルギーへ駐在員として送られた。それまでの生活の中で犬をまた飼うという考えは思いもつかなかったが、駐在2年目の春、犬を飼うことを決めた。まだ幼い我が子達と同じように育てて欲しいと思い、元気な雑種の雄犬を手に入れた。今では信じられないことだが、当時、市場で犬を売ることが許されていた。その後、犬の健康管理などの問題で、市場での犬を売ることが禁止されたのだが、当時は色々な市場で犬も家畜として売られていた。その頃、ナミュールの市場にたくさんの犬を売っているお店が出ていた。どうしても犬が欲しいと思いながら、ベルギーでの犬の入手方法を知らなかった私たちは、市場の犬売り場で一番元気そうな子犬を一匹手に入れた。そして車でモンスの家に戻ったとき、ひと騒動が起こった。車の音や振動、臭いに怖気づいた子犬は運転席の座席の下にもぐりこんで、難を逃げようとしたところまでは良かったのだが、その隙間に挟まり、出て来られなくなってしまった。私たちが「どないしたんや！出てこい」と言いながら緊張した表情で叫ぶと子供達も緊張した表情で成り行きを見つめていた。そして座席の下から救い出したとき「アホやなあ、こんなところに潜りこんだらあかんで！」と笑いながら声をかけると、子供達も笑った。それからこの犬との生活が始まったのだが、この犬もまた母親の胎内から寄生虫を持って生まれてきた犬だった。連れて帰って2週間ほどした土曜日、買物に連れて行った子犬はいつもの元気がなく、自宅に戻って車から降りるとすぐに回虫を吐き出した。すぐにビニール袋に回虫を入れ、ベルギーの獣医システムの判らなかった私たちは、駅前にあったペットショップに犬と回虫を運びこんだ。店の主人はすぐに土曜日に当番として開いている獣医を紹介してくれた。家族みんなで獣医に連れて行くと、回虫のために体力が著しく低下しているとの診断。虫下しの薬などの処方箋をもらい、薬局で薬を購入し、家に連れて帰った。しかし食欲も戻らず、苦しそうに呼吸が荒くなるだけ。おかゆなどを食べさせても、すぐに吐いてしまう。心配しながらも子供達は寝室へ。そして夜半を越える頃、動悸も荒く、体力の低下を感じるほどに衰弱して来た。何かを食べて消化させないと体力勝負に負けてしまうと思った私は、ドッグフードを口に入れ細くなるまで咀嚼し、口移して犬に食べさせた。初めに飲み下したドッグフードは半分ほど吐き出されてしまった。多分咀嚼が足りず、消化できなかったのかと思い次の一口は、離乳食のようなドロドロになるまで咀嚼し口移して飲み込ませた。幼い命がこんな短時間で失われてしまうことは絶対に出来ないと、医学的にも科学的にも根拠のないままに、朝まで流動食を口に流し込み続けた。翌朝、獣医に電話を入れると、日曜日にも関わらず、すぐに連れて来いとのお返事。家族で獣医に連れて行くと、胃が虫に荒らされて消化できなかったようだとお返事。そのまま入院となり、家族全員意気消沈として帰宅。「大丈夫やで、絶対に元気になって戻ってくる」と言ったものの、おそらく私の言葉には力がなかったと思う。そして翌日の夕刻、職場から獣医に電話を入れると、もう元気になったから迎えに来いとのお返事。獣医に飛んで行って、元気な姿を確認。車に乗せて家に戻ったのだが、子犬は興奮して歩いて車内を暴れまわり私の顔を舐めた。座席にオシッコまでしてしまったのはご愛嬌。家に戻ると子供達がまるでお祭りのように熱狂的に子犬を迎えた。子犬も熱狂して、また家の中でオシッコ漏らししたのもご愛嬌。一瞬にして家の中が明るくなった。飼い犬は家族の中に力関係を見つける。一番ボス、可愛がってくれる人、遊び仲間そして自分の子分と、家族に順位をつける。我が家ではまだ小さかった下の子が犬から見ると自分の子分だった。そして遊び仲間は上の子、可愛がってくれるのは妻、そして一番のボスは私だった。私の命令は絶対服従だった。こんなこともあった。家族が一時帰国した冬、私も3日間の出張が入った。厳しい冬の日だったが犬を庭に放し、物置小屋にたっぷりの水と食料を入れ、出張に出かけた。3日目の夜遅く自宅に戻り、すぐに犬の様子を見ると、喜んで飛びついてきた。そしていつもの容器に水を入れてやると、一気に飲み干してしまった。おかしいなと思った私は物置の水を見て驚いた。寒波で水が完全に凍っていたのだった。少なくとも1日以上、犬は水分補給なしで生きていたようだ。元気でいてくれたから笑い話になったが、それ以降は一匹だけで留守番させることは一度もなかった。 《つづく》